

俳雑

第4回

【俳句との出会い】 八木 忠栄

明治生まれの祖父は気が向くと、村の友人たちと句会をやっていたらしい。俳句のことを「発句」「発句」と呼んでいたことを、小学生だった私は憶えている。今も一句だけ記憶しているのは「婆さんや二つ枕で屁をたれた」と詠んで祖母を振り返って笑ったこと。それは「発句」ではなくて川柳だったろうに、爺さま！

中学・高校時代に、私も人並みに俳句や短歌を作ることがあって、学習雑誌に投稿したりしていた。

木枯しや子どもが叫ぶ火の用心

これが記憶にある私の最初の句である。季重なりなど知識がなかったし、気にかけていなかった。たしか中村草田男や松本たかし、短歌では窪田章一郎が選者だった。私は高校時代からさかんに詩を書き出したけれど、二〇代後半に西東三鬼の「水枕ガバリと寒い海がある」に出くわした。俳句の凄さ・恐ろしさに身が震えた。詩に負けていないではないか！

五〇歳を過ぎたころ、親しい詩人たちが集まっている句会に誘われた。以来、詩とはちがう悲喜にはまって遊んでいただいでいる。あくまで遊びではある。